

花鳥風月・俳句

種とんだせいたかのつぽの鳳仙花

傘さしてお観音さん花火なり

はもしゃぶやテレビで旨そう食べたやの

吟行に一度行きたし秋の風

蝉時雨かぼそくなりてふと寂し

石井 トシ子

低山の合宿児等も登山靴

逆転の日本にビールあわものむ

草笛の祖父とコラボのまご二人

草刈機車積んで里がえり

棚田村千客万来車椅子

曾我部 福石

打水や初めての子の跳る下駄

越智 和人

陽に添う色とりどりの鳳仙花

蝉が鳴く庭の木々より沸き上る

秋澄みて山谷清し別子山

狭き庭独り占めしてカンナ燃ゆ

秋の海太古の波もけさ静か

塗堀 良子

背伸びして脚刈られたるオクラかな

高橋学

水とりがおかわりせがむ夏の庭

今城宏子

球児去り赤トンボ飛ぶ甲子園

主亡き空き家囲むや彼岸花

徳永誠一

二才児が跣足で蟬の脱殻触る

蜘蛛の網蟬がかかりてサワサワ揺れる

小林泰子

草花に生きる力を授かりぬ

まなうらに亡き子を思い秋刀魚焼く

鈴木伊都美

草を引く妻の横顔汗ひかる

落合 敦

草の名を覚えてむしる秋の宵

穏やかな顔と声する裾の秋

小野 弘幸

秋高しスキップしたくなる美空

鰯雲高く泳ぐや瀬戸の海

柿の実の甘さにお茶のすすむ午後

小田 和子

小石蹴る少年独り秋の暮

案山子へと一礼無人駅を発つ

刈田へとボール蹴る子や青き空

小田 慶喜

秋刀魚食う標本のような骨残し

神野 幸男